

D-4 乳幼児の運動発達について—主として歩行・平衡に関する実験的研究—
東京家政大家政 O須賀明美 薮島高子 宮崎照子

目的 乳幼児の運動発達に関する調査は、あまり行なわれていない。わが国に、「平衡機能と情緒との関連」とか、「歩行運動の過程における歩巾や足先角度の観察」などがあるくらいで、ことに低年齢児の平衡調査は見当らない。

そこで、本学児童学科の附属機関である、アースリー・ルームにおける生活観察の中から、運動発達—特に歩行について、実験的研究をし、この過程における、歩行姿勢、歩巾、足の位置、バランスのとり方の変化、などについて実態を把握し、保育に役立ててゆきたい。

方法 始歩期から3才までの乳幼児を対象として、先づ平面歩行における足跡をとり、歩巾、足の位置、足先角度などを測定し、姿勢、バランスのとり方を記録した。また階段登降時の足のふみ方、きき足、姿勢などの発達年齢による変化、2才児、3才児においては高さ、巾、長さの異なる4基の平均台歩行について、きき足、バランス等を調査した。そして、これらの関連についても検討した。

結果 歩行の初期では、子どもの情緒が強く影響し、不安、興奮などにより左右され、保育や子ども同士の励まし、周囲の状況により、変化がみられた。

ほかに、津守式、遠城寺式の運動発達の延びのよい子どもは、歩行、階段の登降、平均台も高い値が出ている。2・3才児の平均台実験では、練習効果が著しく、保育中の運動的なあそびとの関連も見逃せないことが明らかになった。